

抗 Jra 新規獲得患者の緊急手術に対応した一症例

◎齊藤 健太¹⁾
公立甲賀病院¹⁾

【はじめに】抗 Jra は高頻度抗原である Jra 抗原に対する同種抗体であり輸血や妊娠によって産生される。今回、当直帯に緊急手術で Jra 抗原陰性血が必要になった症例を報告するとともに、当院輸血検査運用について考察した。

【症例】80 歳代女性。A 型 RhD 陽性。右大腿骨頸部骨折で救急外来受診、手術目的で入院。当院で輸血歴あり（輸血前不規則抗体スクリーニングは陰性）。現在までの他院での輸血歴不明。

【経過】某月 22 日当直帯に全自動輸血検査装置（ORTHO VISION）で不規則抗体スクリーニングが陽性となり、試験管法（IAT 法）で自己対照を除く 11 本のパネル血球が全て「2+」凝集を示し、抗体価が 64 倍であった。その時点で高頻度抗原に対する高力価低親和性抗体を疑い、翌 23 日、血液センターへ精査依頼した。手術は 23 日予定であったが、適合血は入手困難であることを伝え、24 日に変更となった。血液センターの迅速な精査の結果、抗 Jra と確定し、24 日には必要な製剤を確保できたため、手術は無事終了した。使用量は術前に照射赤血球液-LR2 単位、術中に新鮮凍結血

漿-LR240 が 2 本、術後に照射赤血球液-LR2 単位であった。

【考察】今回、当直という時間帯に、稀な血液型に遭遇したことで、当検査課において輸血検査運用に対し考察する機会を得た。術前の不規則抗体検査の反応態度から、抗 Jra のような高頻度抗原に対する同種抗体を推測できたことが、その後の迅速な対処に繋がった。また、臨床側と密に連絡を取り合うことで、患者状態をふまえ、手術日は一日延期となったが、速やかに入手困難な製剤の手配ができた。

【結語】高頻度抗原に対する同種抗体は、抗 Jra 以外にも存在し、今回のような単独抗体ばかりでなく、複合抗体も報告されている。当院では日常、輸血検査に携わらない技師も輸血検査を実施することから、技師全体の輸血に関する知識や技術をさらに向上することが望まれる。そのため、検査課内でも勉強会や報告会を行うなど、時間外においても質の高い安全な輸血を提供できるよう努めることが必要である。

連絡先：0748-62-0234（内線 1565）